

7月30日(土)発行

MUZA
KAWASAKI
SYMPHONY HALL

ほほ
日刊サマ-ミューザ



Hobo Nikkan Summer Muza

一世一代のブルックナー、
一期一会の奇跡的な名演



©T.Takedate

2024年末の引退を宣言した井上道義。ハイドン「告別シンフォニー」とブルックナー「交響曲第9番」が並ぶ、まるで井上のラスト・コンサートのようなプログラムだ。

しかし、そんな感傷を笑い飛ばすような仕掛けを井上は用意していた。「告別」第4楽章のアダージョになると場内が暗くなり、スクリーンにラクダに乗った井上と、「ここから指揮者はラクダ？」と映し出される。続いて奏者一人一人の休日風景(野球観戦、旅行、ゴルフなど)が映り、



7/29 読売日本交響楽団 告別と絶筆。一期一会のシンフォニー

その順で次々とステージから去っていく。ついには井上も去り、最後はヴァイオリン奏者二人が立奏しながら舞台袖に消え、真っ暗になった。サマ-ミューザらしい演出に聴衆は大喜び。肝心の演奏は、パントマイムのような井上の指揮から、生き生きとした切れ味抜群のハイドンが生まれていた。

後半のブルックナーの9番は井上道義一世一代の演奏。第1楽章から井上はブルックナーと一体となる。ハイドンと異なり動きは最小限だが、読響から生まれる響きは凄まじく、かつ隅々まで美しい。クライマックスの金管の

咆哮は読響の真骨頂。コーダの激しさは魂が叫ぶようだ。第2楽章スケルツォは壮絶で、鬼気迫るものがあった。第3楽章アダージョの頂点での全管弦楽の爆発と、直後の全休止は時間が永遠に止まったかのよう。その後、ホルン、ワーグナー・チューバ、トロンボーンの美しいハーモニーと共に、浄化され全てを超越した世界に入ってしまった。プレトークで読響とのブルックナーはこれで最後と話した井上の指揮に、楽員たちが全力で応えた、まさに一期一会の奇跡的な名演だった。
(音楽評論家 長谷川京介)



井上道義マエストロのサイン

お客様から

生きていて本当に良かった!!素晴らしいかったです。(50代・となりのキティちゃん) / 井上さんのプレトークがまず傑作。「ブルックナーを配信で聴いたって何も面白くない」は至言。事実、ホールを満たす読響の重厚な音響を聴けば謙しも欲くはず。魂から溢れ出した名演奏でした。ハイドンの「告別」。井上さんなら何かやるだろうと思いましたが、曲の終盤まさか全員が退場するとは!!労を惜しまぬ企画に拍手。(60代・クラシック大好き60年) / とにかく素晴らしいの一言です。井上さんの全てが演奏に乗り移り、読響の音色とともに最高のブルックナーでした。(60代・涙のレオン) / 井上道義さん指揮のコンサートを聴くのはおよそ22年ぶりです。前回(すみだトリフォニーホール、マラー8番)の演奏の素晴らしさが強く印象に残っており、今回も大変楽しみにしておりました。しばらくクラシック鑑賞から離れており、今回のコンサートは某YouTube番組で偶然目にして久々にチケットを確保した次第です。井上さんが2年後に引退されることもその番組で知りました。幸運な巡りあわせでこの場にいられたことを幸せに感じます。(50代・小日向) / 井上道義氏の振るコンサートはいつも何か特別な「イベント」になる。なるほど。オリジナルだ。確かに最後に悲しみはない。一本取られた。マエストロらしい明るいブルックナー。さすが体力のあるオーケストラ。息切れしない。全力のトレモロは人力でしか出せない音。井上さん、来年も来てください。(ミューザサマ-ミューザ) / 山梨から飛び出して聴きにきました!感染症に負けず、これからも音楽を楽しみたいと思います。今日は思い切って来た甲斐がありました!井上先生指揮のハイドン&ブルックナー最高でした!!(50代・kohaku)

配信控え室から

サマ-ミューザは配信も充実!
見どころ・聴きどころや
配信の現場の声をお届けします。

上記レビュー公演のアーカイブ配信は
7/31(日)正午から開始!

引退を表明した井上道義がブルックナーの白鳥の歌とも言うべき9番のシンフォニーに挑んだ。映像から、彼のある種の覚悟、壮絶なまでの生き様をストレートに感じていただけたと思います。(From プロデューサー)



【出演】指揮：井上道義
【曲目】ハイドン：交響曲第45番「告別」
ブルックナー：交響曲第9番(ノヴァーク版)
【配信限定コンテンツ】
オープニングインタビュー：日下紗矢子
(読売日本交響楽団 特別客演コンサートマスター)

